

桜井駅跡発掘調査概要

一般府道桜井駅跡線自歩道・主要地方道西京高槻線歩道整備工事に伴う調査

2007年3月

大阪府教育委員会



はじめに

島本町は大阪府の北東端、京都府との府境に位置する。この場所は、淀川をはさんで天王山と男山丘陵が対峙する間にある山崎狭陰部が南北にはしる西側部分にあたる。この地点は、難波—山崎—淀を經由する淀川の水運の要となるとともに、その右岸は陸路として京都・神戸間を最短で結び、近世においては東海道の脇道「山崎通（ミチ）」と公称される西国街道がある。

そして、この街道沿いには国指定史跡である桜井駅跡（楠木正成伝承地）が立地するのである。

この指定地に南接してＪＲ線の新駅設置に伴い自歩道整備工事が持ち上がった。これを受けて本府教育委員会は平成 17 年度に試掘調査を実施したところ、遺跡が東側に拡がることが判明した。現在、新駅関連道路整備工事用地の調査を随時、実施しているところである。

調査成果の一部として、史跡指定地に隣接する東側部分は駅前広場の知見に見合う中世期の拡がり方が確認できた。それより離れる東側では、従来から知られる古代・中世の遺構・遺物の他、埋没谷を中心に弥生・古墳時代のものが存在するという新知見があった。その中でも、中世期の桜井駅跡に関連したと考えられる外域の状況を判断できるようになった。今後、この区画のもつ意味を鮮明な具体像で描くことが可能となることを期待したい。

調査にあたっては、島本町教育委員会、大阪府茨木土木事務所高槻工区、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々にご協力いただいた。深く感謝し、今後ともこの地における文化財保護行政にご理解、ご協力をお願いするとともに、上記のような歴史的環境を地域に生かすことで保護・保全・活用に向かうようお願いする次第である。

平成 19 年 3 月

大阪府教育委員会文化財保護課長

丹上 務

例言

1. 本書は、大阪府教育委員会が、大阪府都市整備部の依頼を受け、一般府道桜井駅跡線白歩道整備工事予定地について平成17年度に試掘調査を実施し、平成17・18年度に桜井駅跡（楠木正成伝承地）として北側用地を中心に発掘調査を実施し、さらに、平成18年度に主要地方道西京高槻線歩道整備工事予定地を桜井駅跡（楠木正成伝承地）・西国街道について実施した大阪府三島郡島本町桜井1丁目地内所在の発掘調査概要報告書である。調査番号は05025・06010・06063である。
2. 調査は、文化財保護課 調査第一グループ 総括主査 岩崎二郎、主査 一瀬和夫、技師岡田 賢が担当した。遺物整理は調査管理グループ、主査 三宅正浩、技師 藤田道子が担当した。
3. 調査に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
4. 調査の実施にあたっては、島本町教育委員会、大阪府都市整備部、大阪府茨木土木事務所高槻工区をはじめとする諸機関、関係諸氏の協力を得た。
5. 本書の編集は、一瀬が担当し、執筆は調査担当者等が分担した。
6. 本概報は、300部を作成し、一部あたりの単価は284円である。

目次

はしがき

例言

目次

第1章 既往の調査	1
第2章 調査の経過	3
第3章 東西区の試掘調査	4
第4章 東西区の調査	8
第1節 層序	8
第2節 各遺構面の調査	8
第5章 南北区の調査	18
第6章 出土遺物	21
第1節 東西区の弥生・古墳時代	21
第2節 東西区の古代以降	22
第3節 南北区	24
第7章 まとめ	27

写真図版

報告書抄録

がりがおさえられるようになった。そうした現在に至る旧石器・縄文時代からの遺跡に関する知見の一部を示したのが表1である。 (一瀬)

(参考文献)

- 『島本町史』本文編 島本町町史編さん委員会 1975
 『水無瀬往跡遺跡 発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会 1996
 『越谷遺跡他 発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会 1997
 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第1集 広瀬遺跡発掘調査概要1 島本町教育委員会 1991
 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第3集 山崎東遺跡発掘調査概要報告 島本町教育委員会 2002
 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第4集 御所ノ平遺跡発掘調査概要報告 島本町教育委員会 2003
 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第5集 町内遺跡範囲確認調査概要報告 島本町教育委員会 2004
 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第7集 山崎地区遺跡範囲確認調査概要報告 島本町教育委員会 2005
 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第8集 桜井駅跡遺跡範囲確認調査概要報告 島本町教育委員会 2006
 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第9集 平成17年度都市計画桜井駅跡線(駅前広場)整備に伴う桜井駅跡遺跡発掘調査概要報告 島本町教育委員会 2006

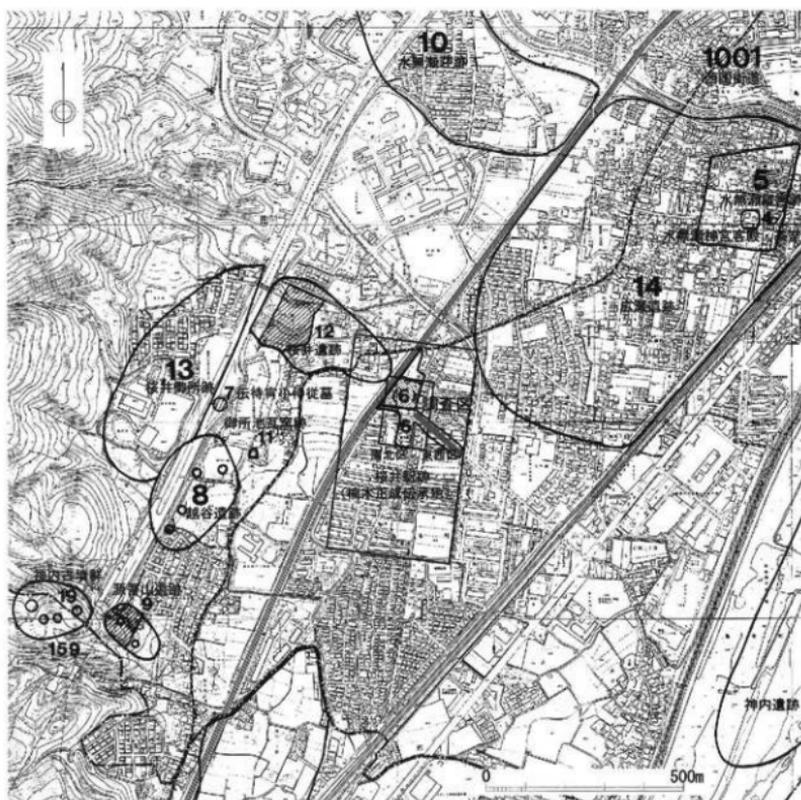


図1 調査位置とその周辺の遺跡分布

第2章 調査の経過

大阪府三島郡島本町桜井1丁目に所在する桜井駅跡(楠木正成伝承地)国指定地に南接してJR線の新駅設置に伴い、阪急京都線水無瀬駅と連絡する一般府道桜井駅跡線自歩道整備工事計画が持ち上がった。これを受けて本府教育委員会は、平成17年度上半期の樟並木の街路樹移設に伴って試掘調査を実施したところ、遺跡が東側に拡がることを確認し、引き続き現在、その関連道路整備工事用地の発掘調査を行っているところである。

本調査はまず、試掘所見にしたがい平成17年度末から拡幅用地である道路北側部分の全面調査にとりかかった。これに併行して、平成18年度下半期には都市計画道路桜井駅跡線(駅前広場)整備用地に東接して南北にはる西国街道でもある主要地方道西京高槻線歩道整備工事予定地の西側拡幅部を調査を実施している。

現在ある一般府道桜井駅跡線は40°西に振る東西道であり、歩道が狭くその北側を幅6m広げて全体を拡幅する計画である。その取得用地を中心に長さ96m、幅5mで発掘調査を行った。南側の本線供用部分については、埋管等構造物の掘削が遺物包含層まで達する部分を、現在、随時、調査を行っているところである。これを東西区とした。一方、西国街道に沿った南北に走る主要地方道西京高槻線の方は、西側を幅2.0mで発掘調査を行い、これを南北区とした。

これら調査区に隣接する桜井駅跡史跡指定地の立地についてみると、西側に桜井丘陵から南東に向い細長く2本併行してのびる大阪層群のうちの南側に桜井遺跡がある。それがJR京都線の手前で微高地となって続き、その線路を隔てた西に指定地がそれにのる。この付近では、南接した大阪府立青年の家跡地を平成15年度に島本町教育委員会が試掘調査を行ったのが最初である。

その調査において、中近世の遺構・遺物が確認されたことにより、この地が都市計画道路桜井駅跡線(駅前広場)整備予定地と計画されたことから、追って平成17年度に島本町教育委員会が東半分の発掘調査を行った。さらにこの調査区に南接する麗天館のある島本町立歴史文化資料館用地の北側でも町教育委員会が遺跡範囲確認調査を実施している。それら所見は、弥生時代前期・後期末の環形土器、古墳時代の土師器の出土、鎌倉～室町時代の瓦器椀などを含んだ大形柱列、室町時代の石組井戸、道路状遺構、土師器を多量に含む土坑、掘立柱建物などの検出といったものであった(注)。

さて、今回の調査区は、指定地から南に微高地が伸びる麗天館東側の南北区と、さらに指定地をこえて東へ下降しながら続く微高地上にあたる東西区とからなる。その成果は、以下に述べるとおりである。

(一瀬)

(注)

『島本町埋蔵文化財調査報告書』第8集 桜井駅跡遺跡範囲確認調査概要報告 島本町教育委員会 2006。
『島本町埋蔵文化財調査報告書』第9集 平成17年度都市計画桜井駅跡線(駅前広場)整備に伴う桜井駅跡遺跡発掘調査概要報告 島本町教育委員会 2006。

第3章 東西区の試掘調査

平成17年度上半期に行った試掘調査は、道路工事に先立つ街路樹の撤去・伐根の際に、旧表土以下の土層を確認する方法で行った。その地点は25箇所、他にNo.10の東に長さ5mのトレンチを1箇所設けた(図2)。

各地点における基本層序は図2、表2のとおりである。このうち3層の茶味灰色砂質シルトは近世陶磁器片が包含される耕作土である。また6層の淡黄灰褐色砂質シルトや7層の淡黄褐色砂質シルトは、地点によって土質がやや異なるが、平成17年度に島本町教育委員会が行った桜井駅跡の発掘調査で検出された、中世遺構面を形成する層位である。従って4・5層の淡茶褐色粘質シルトおよび同色シルトは近世～中世にかけて形成されたと考えられる。これらにはNo.3とNo.5の間で段差があり、同様の段差はNo.13とNo.14、またNo.22とNo.23でも認められることから、現地表面にみられる南北方向の段差(南下がり)は中世には形成されていたことが明らかになった。

8層の暗灰褐色粘質シルトは、地点により土色や土質がやや異なるが、No.12やNo.21にて土師器片が検出されており、古墳時代前期頃の遺物包含層である。この層は試掘トレンチにおいて

表1 試掘調査 地点別層序一覧

<p>No.1 現況 T.P.11.325a 淡茶褐色シルト T.P.+10.9a~10.4 (中～近世) 淡黄褐色粘質シルト T.P.+10.6a~ (中世)</p>	<p>No.11 現況 T.P.+11.370a 淡黄褐色粘質シルト T.P.10.3a~10.1a (中世) 暗灰色粘質シルト T.P.10.1a~9.7a (古墳時代)</p>	<p>No.21 現況 T.P.11.348a 黄褐色粘質シルト T.P.10.4a~10.2a 暗灰褐色粘質シルト T.P.10.2a~10.1a 暗灰色粘質シルト T.P.10.1a~10.0a (土層片混じり) 暗灰色砂質シルト(確認) T.P.10.0a~ (土層片混じり)</p>
<p>No.2 現況 T.P.11.407a 淡黄褐色シルト T.P.+10.9a~10.6a (中～近世) 淡黄褐色粘質シルト T.P.+10.6a~10.4a (中世) 灰色凝結砂質シルト T.P.+10.4a~</p>	<p>No.12 現況 T.P.+11.500a 茶褐色粘質シルト T.P.10.5a~10.4a (近世) 淡黄褐色粘質シルト T.P.10.4a~10.2a (中世) 暗灰色粘質シルト T.P.10.2a~10.0a (古墳時代)</p>	<p>No.22 現況 T.P.11.377a 黄褐色粘質シルト T.P.10.3a~10.15a 暗灰褐色粘質シルト T.P.10.15a~10.0a 暗灰色粘質シルト T.P.10.0a~</p>
<p>No.3 現況 T.P.11.452a 淡黄褐色シルト T.P.10.9a~10.6a (中～近世) 淡黄褐色粘質シルト T.P.+10.6a~ (中世)</p>	<p>No.13 現況 T.P.11.581a 淡黄褐色粘質シルト T.P.10.3a~ (中世) 暗灰色砂質シルト T.P.+9.6a~</p>	<p>No.23 現況 T.P.11.447a 黄褐色粘質シルト T.P.10.1a~9.90a 淡灰褐色粘質シルト T.P.9.90a~9.85a 暗灰色粘質シルト T.P.9.85a~9.7a</p>
<p>No.5 現況 T.P.11.384a 黄褐色粘質シルト T.P.+10.6a~10.2a (中～近世) 黄褐色シルト T.P.+10.2~10.0a (中世) 茶褐色シルト T.P.+10.0a~</p>	<p>No.14 現況 T.P.11.442a 淡黄褐色粘質シルト T.P.10.1a~9.8a (中世) 暗灰色砂質シルト T.P.+9.6a~</p>	<p>No.24 現況 T.P.11.513a 暗灰色粘質シルト T.P.10.2a~10.2a 黄褐色粘質シルト T.P.10.2a~10.1a 暗灰色粘質シルト T.P.10.1a~10.0a 暗灰色砂質シルト(確認) T.P.10.1a~</p>
<p>No.6 現況 T.P.11.306a 淡黄褐色シルト T.P.+10.4a~10.3a (中～近世) 暗灰色粘質シルト T.P.+10.3a~10.2a (中世) 暗灰色砂質 T.P.+10.2a~</p>	<p>No.16 現況 T.P.11.264a 暗灰色シルト T.P.10.4a~10.1a</p>	<p>No.25 現況 T.P.11.519a 淡黄褐色粘質シルト T.P.10.2a~10.1a [層の連続性] 暗灰色粘質シルト T.P.9.95a~9.8a 暗灰色砂質 T.P.9.8a~</p>
<p>No.7 現況 T.P.11.306a 現況 T.P.11.306a 淡黄褐色粘質シルト T.P.+10.5a~10.4a (近世) 暗灰色砂質 T.P.+10.4a~10.2a (中～近世) 暗灰色粘質シルト T.P.+10.2a~10.1a (中世) 暗灰色砂質 T.P.+10.1a~</p>	<p>No.17 現況 T.P.11.266a 黄褐色粘質シルト T.P.10.4a~10.2a 淡黄褐色粘質シルト T.P.10.2a~10.1a 暗灰色砂質 T.P.10.1a~</p>	<p>No.26 現況 T.P.11.595a 淡黄褐色粘質シルト T.P.10.2a~10.1a [層の連続性] 暗灰色粘質シルト T.P.10.1a~9.9a 暗灰色砂質 T.P.9.9a~</p>
<p>No.8 現況 T.P.11.311a 淡茶褐色シルト T.P.+10.5a~10.2a (中～近世) 茶味灰色粘質シルト T.P.+10.2a~10.1a (中世) 淡黄褐色粘質シルト T.P.+10.1a~ (中世)</p>	<p>No.18 現況 T.P.11.298a やや暗い褐色粘質シルト T.P.10.6a~10.4a 黄褐色粘質シルト T.P.10.4a~10.2a 暗灰色砂質 T.P.10.2a~</p>	<p>No.27 現況 T.P.11.720a 暗黄褐色粘質シルト T.P.9.9a~9.7a</p>
<p>No.9 現況 T.P.11.346a 茶味灰色砂質シルト T.P.+10.5a~10.2a (近世) 淡黄褐色粘質シルト T.P.+10.2a~ (中世)</p>	<p>No.19 現況 T.P.11.298a やや暗い褐色粘質シルト T.P.10.6a~10.4a 黄褐色粘質シルト T.P.10.4a~10.2a 暗灰色砂質 T.P.10.2a~</p>	<p>試掘トレンチ 現況 T.P.11.618a 淡黄褐色粘質シルト T.P.10.2a~10.1a (中～近世) 暗灰色粘質シルト T.P.10.1a~9.9a (古墳時代(確認))</p>
<p>No.10 現況 T.P.11.431a 茶味灰色粘質シルト T.P.+10.3a~10.2a 淡黄褐色粘質シルト T.P.+10.2a~10.1a (中世) 暗灰色粘質シルト T.P.+10.1a~9.8a (古墳時代)</p>	<p>No.20 現況 T.P.11.339a 淡黄褐色粘質シルト T.P.10.5a~10.35a 淡黄褐色粘質シルト T.P.10.35a~10.25a 淡黄褐色粘質シルト T.P.10.25a~10.15a 暗灰色粘質シルト T.P.10.15a~9.9a 暗灰色砂質 T.P.9.9a~</p>	

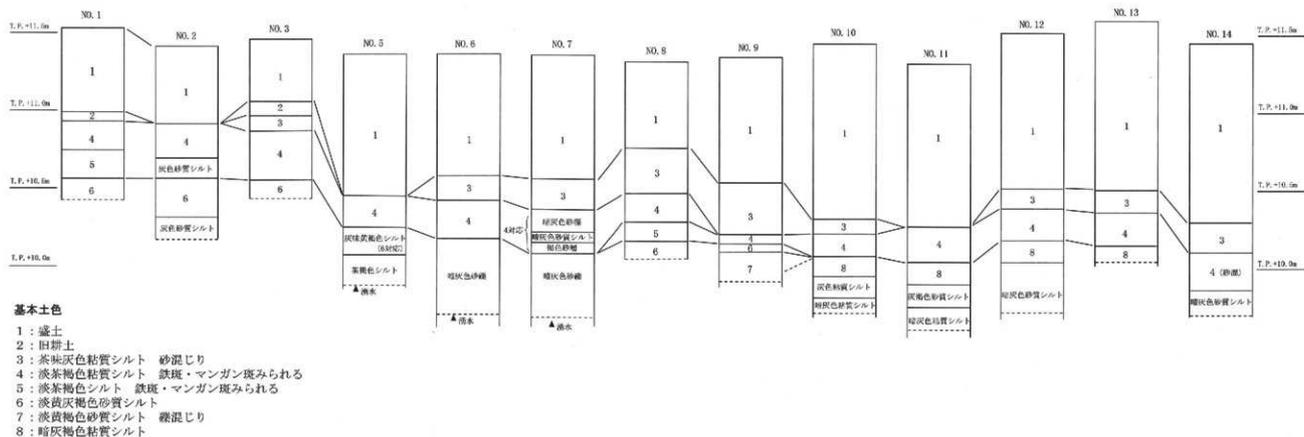
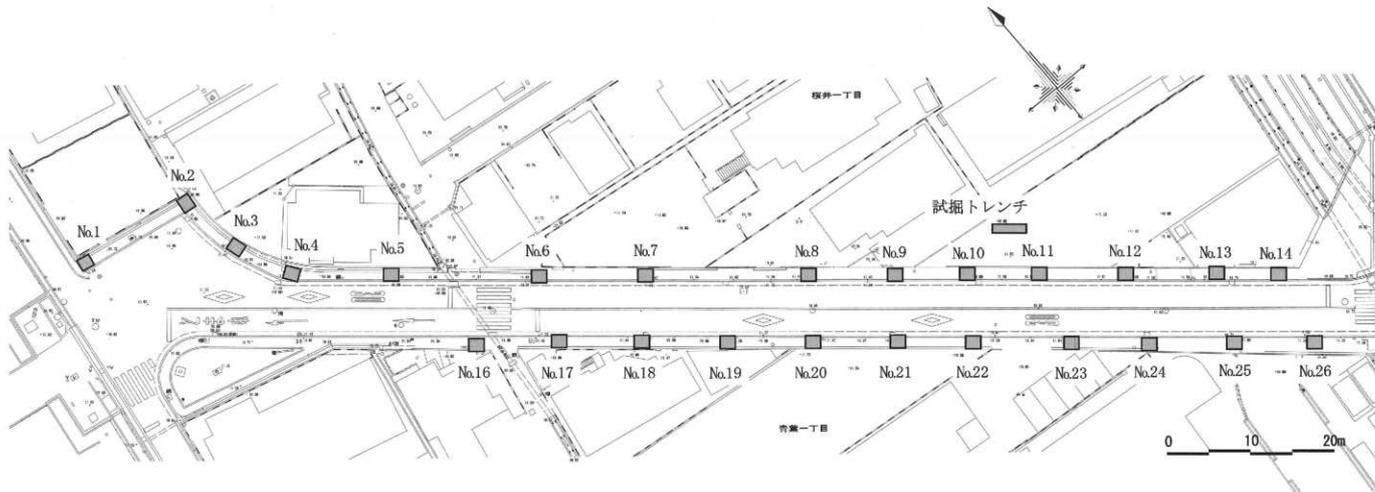


図2 試掘調査箇所とNo.1～No.14の土層断面模式

も認められ、当該期の遺構や遺物が道路の北東・南西にかけて分布していることが確認された。No.6・7およびNo.17～20にかけて確認された湧水を伴う暗灰色砂礫層を挟んだ東側の、No.16においても暗黄灰色シルトが確認されている。道路拡幅部はもとより、試掘地点の周辺では古墳時代遺構面が存在する可能性が高いことが判明した。従って遺跡範囲の拡大措置を講じ、道路拡幅部の発掘調査を行うことになった。

(岡田)

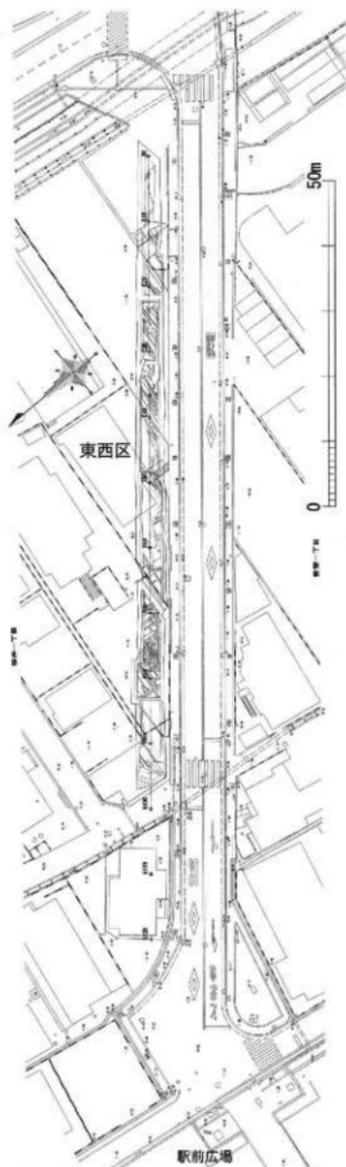


図3 東西区地区設定

第3章 東西区の調査

第1節 層序

調査した東西区の地表面はおおむね T.P.11.6 mを前後し、0.9 mの厚さの盛土があり、その下に旧耕作土があり、下面が第1面となり、下層に厚さ 0.05 mの床土をはさんで第2面となる。

この下、この区の基本層序はまず、中・近世のマンガング粒を含んだ黄・茶灰色粘質シルト系があり、下面が第3面となる。これより下は第5面までは平面的に追えるが、その下は第7面下の灰色砂礫層の隆起により地点ごとで土層の欠落や厚みに不均等が顕著になる。

第3面下は淡茶褐色粘質シルト系、黄灰褐・黄味淡茶灰色粘・砂質シルト系が続く。この間は基本的には耕作土と考えられ、耕地の拡大安定化による層厚の変化と解釈できる。

その下面では自然の起伏を特徴的に示す淡黄褐色粘質シルトの酸化面である第4面が T.P.10.0 ~ 10.3 m で存在する。酸化を受けた下は赤・黄色ブロックを含んだ暗灰褐・黒灰色粘質シルト系と黄色ブロックを含む暗黄褐色粘質シルト系層があり、下が第5面となる。この面より下の遺存はより散漫な分布となる。この面は T.P.10.0 ~ 10.2 m を前後する。

暗茶褐色粘質シルトの下にある第6面は E20 ~ 65 m 付近の灰色砂礫のくぼみを中心として見られ、さらにオリブ味暗茶褐色砂質シルトを経て、E30 ~ 45 m 地点では地形の鞍部に黄灰色粘質シルトをベースとする良好な遺構面が見られた。

全域に見られる灰色砂礫は縄文時代晩期から弥生時代中期初めの間にかけて堆積したと考えられ、これより下に深く調査掘削した E13 m 付近においてオリブ味暗灰色・黒味青灰色粘土を T.P.9.00 ~ 9.4 m で確認し、わずかに縄文土器細片が出土している。 (一瀬)

第2節 各遺構面の調査

1. 第1~4面

第1面は現代で基本的に水田を中心とし、第2面は陶磁器や銅銭などから 16 世紀以降、近世前半期を中心とした時期であり、小溝を多く伴う。東西・南北方向の小溝が調査区全体に及び、わずかに東にふる東西方向のものが圧倒的に多い。

ただし、第1面に付随する遺構では、最も西側の E95 m 付近で現水路に影響を受けると考える畦畔状のものを伴ったドブ状の現代溝が西にふる。最も東側の E0 ~ 10 m 間でも、現・高川の影響を受けて西にふると考えられる。これらは河川・水路によるものであるが、第1面でも東西方向の小溝が基本で、E90 m 付近にある道路状の高まりはそれと方向が同じであり、また中央でも東西方向の南北 12 m、東西 15 m 以上のため池が存在した。

第3面はより一層、東西方向主体の東西方向の小溝が占められ、全体としては耕作面それぞれにかなり安定した状態を見ることが出来る。その中で、顕著に確認できた南北方向のものに、E55 m ~ 65 m 間で、平行する 3 m と 9 m 間隔のものがある。東西方向のものは、E70 m から

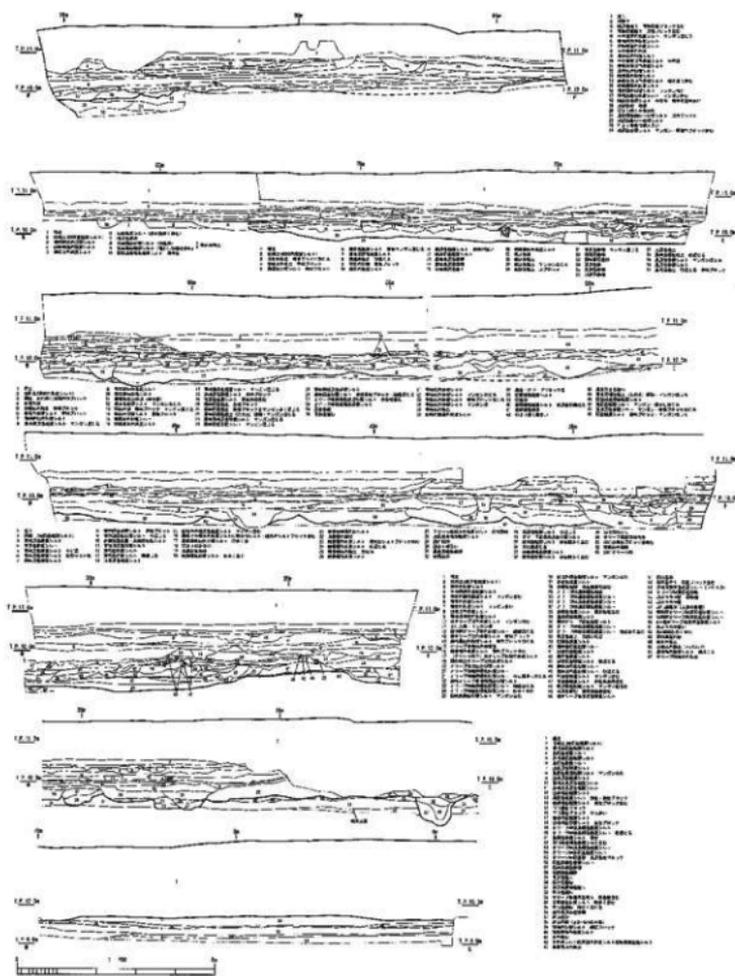


图4 东西区北壁土层断面

西側では0.5m前後の幅広いものになる傾向がある。時期としては、出土瓦器検などから13～15世紀が主体的であり、下面は13世紀となろう。

第4面は8・9世紀を中心とする時期で暗茶灰色粘質シルトをベースとする。すでにこの時点で安定した小溝を伴う遺構面が存在する。東西区中央は幅15mで東西溝が緩慢な部分がある。そして、その南北は7～13m間隔で東西溝が緩慢な部分があり、東西単位の短冊形の地割が読み取れそうである。これは現在の地割ともつながっている。(一瀬)

2. 第5面

第5面は古墳時代の遺構で構成されている。掘立柱建物跡・溝・小溝・落込み・土坑を検出した。E30～40mまでの部分では同時代の遺構が特に集中し、切り合う状況を呈する。また、掘立柱建物SB01の方向と溝SD02・05の流路方向が一致することから、特にこれらは同時期に存在した遺構であると推定される。遺物は土師器甕や須恵器杯身が出土した。ここでは溝SD05について詳述する。

第5面上面のE32～33mで南北方向に延びる溝を検出した。基盤層は黒オリーブ味灰色砂質土である。E20～60mまで谷状となって削平をまぬがれているが、削平残りの部分では古墳時代の遺構が見られる。特にSD05を含む部分は溝や土坑などが集中することになり、切り合う状況を呈する。東にある掘立柱建物SB01に向かって遺構面は上昇する。

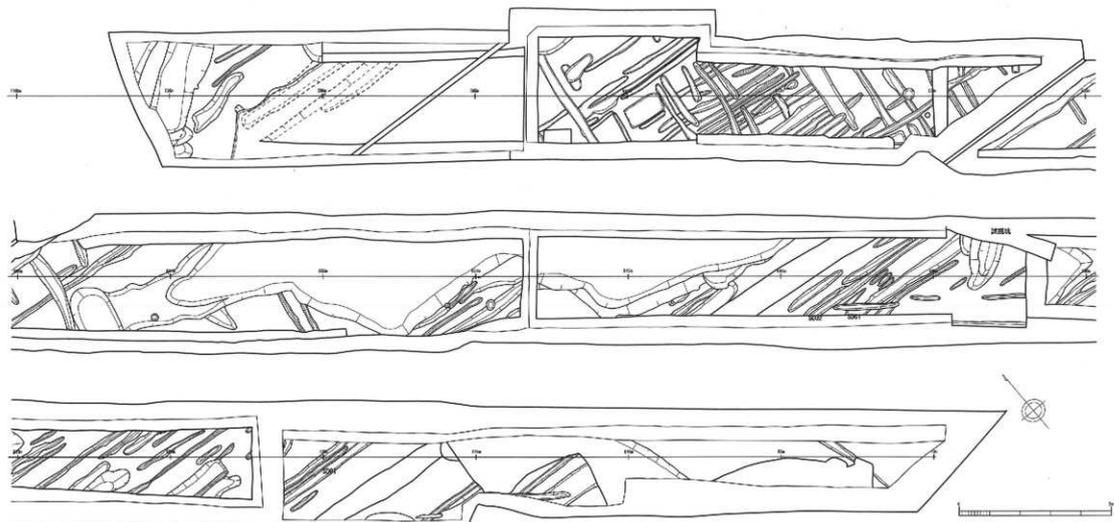
溝は、検出長2.1m、幅1m、深さ0.3mを測る。断面は皿状を呈し、底部は0.2mの平坦面を形成し立ち上がる。溝の西側北半分でクリーム味明灰色粘土(5層)上面に1段を形成する。標高は、底部がT.P.9.7mに、検出面がT.P.10mに位置する。

溝は、E33～35mに掘削された隅丸方形土坑の埋土である黄褐色系土(6～9層)を切り込んで形成されている。埋土は3層で構成されている。まず土坑埋土を切り込んで溝が形成された後、クリーム味明灰色粘土(5層)が堆積する。次いで暗黄褐色粘質シルト土(4層)が堆積し、下面には炭化物層が形成される。最終的に暗灰色粘質シルトブロック含む暗黄褐色砂質シルト土(3層)が堆積する。

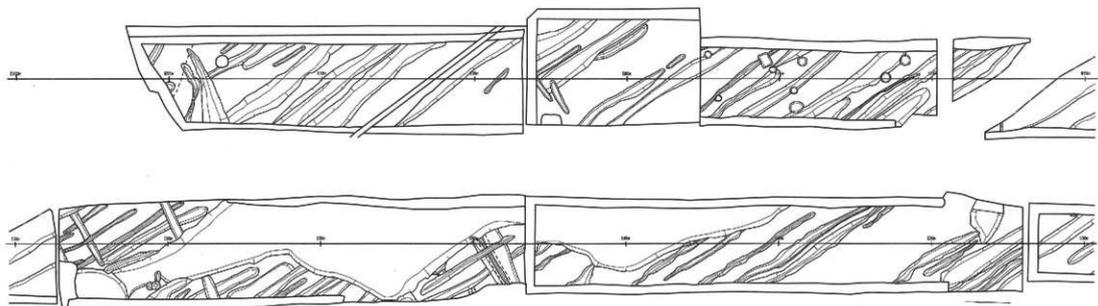
SD05の流路方向と、E40～45mの溝SD02の流路方向及びE22～26mの柱間1.2m、2間×2間以上の掘立柱建物SB01の配置方向は一致する。

暗黄褐色シルト土の下面、T.P.9.8mの標高から、4層と5層の境界に沿って炭化物が大量に出土した。炭化物は長さ0.1m～0.5m、厚さ1cm程度で、非常に脆く、薄く伸びており、塊になっているものは無い。このため、本来は蕨のような形状を呈していたと考えられる。特に一箇所に集中する事は無く、溝全体から満遍なく出土した。炭化物の形状には溝の流路方向に沿うものと直交するものの2種が看取でき、この差は炭化物が埋没した際の配置を示すと考えられる。これらのことから、蕨状のものが2方向に重なり埋没した結果、形成された炭化物群であると考える。

遺物は、溝上面からTK47型式に相当すると考えられる須恵器杯身片が出土した。



第1·2面



第3面

图5 东西区第1~3面平面

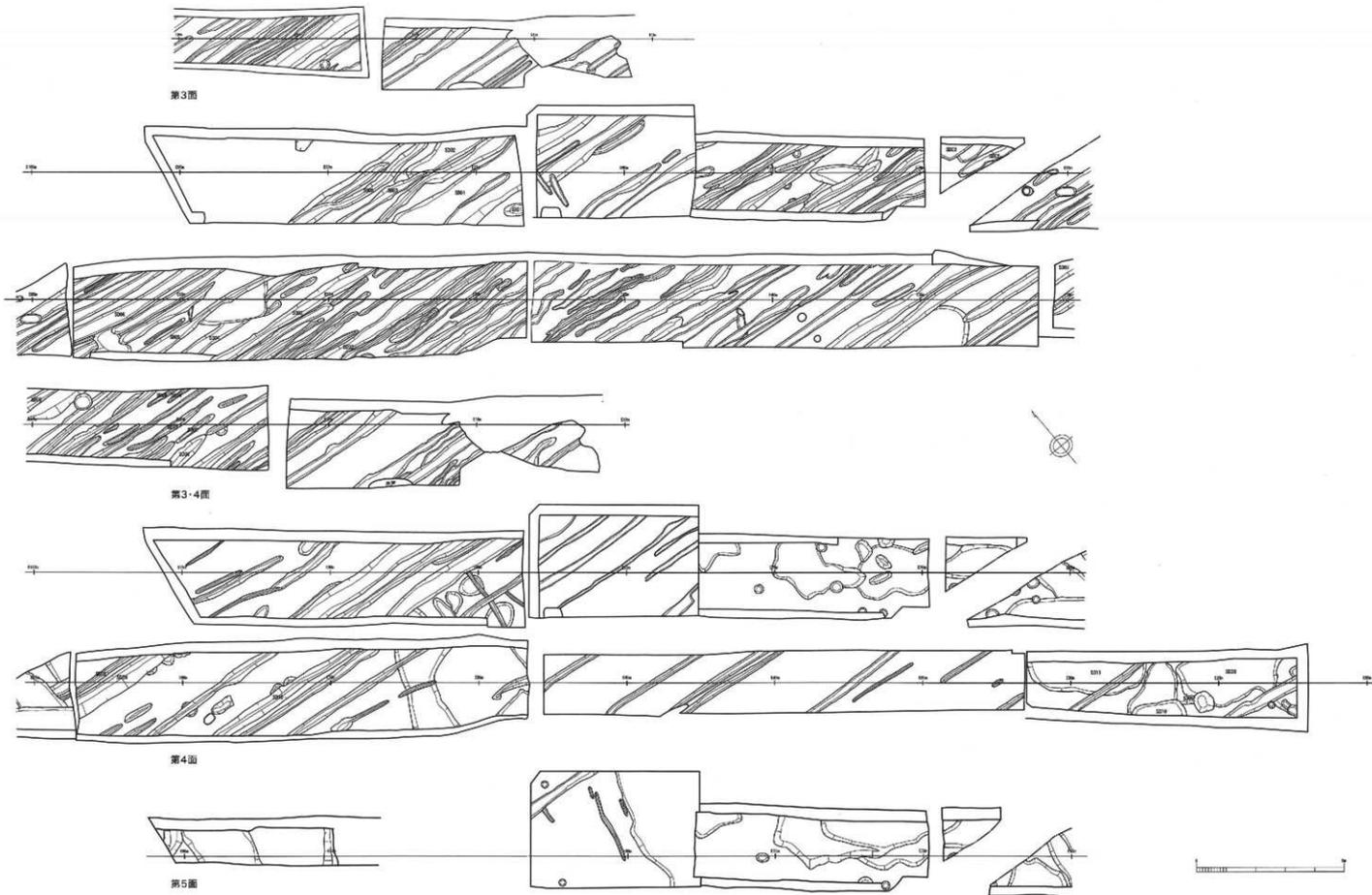


图6 东西区第3~5面平面

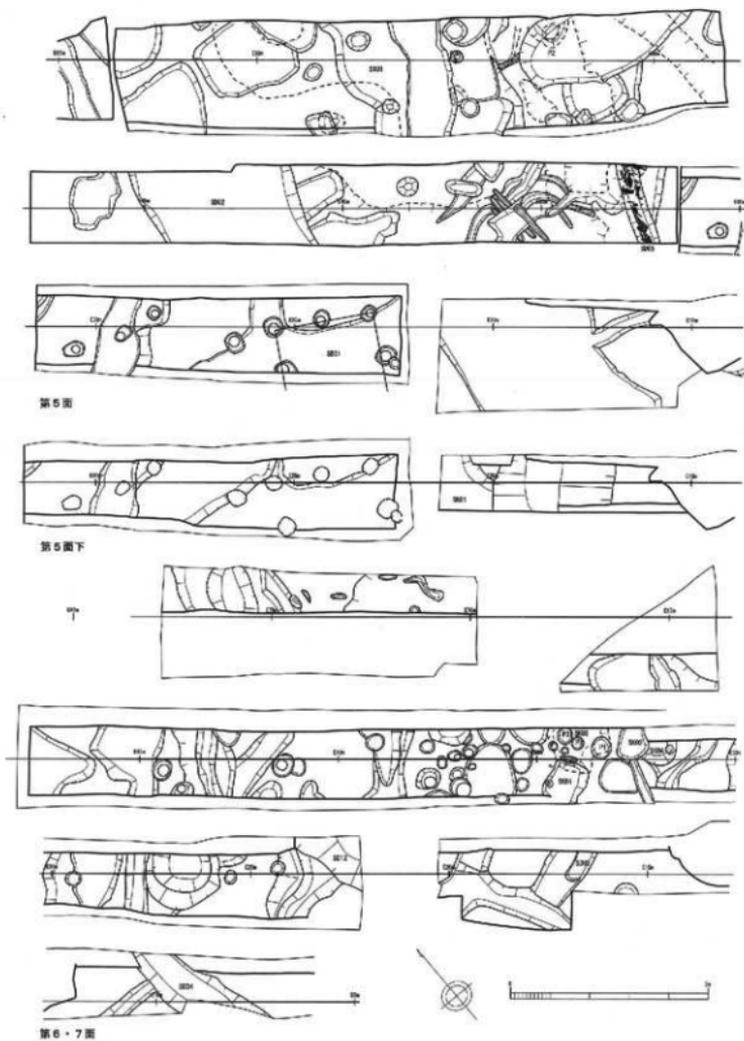


图7 东西区第5~7面平面

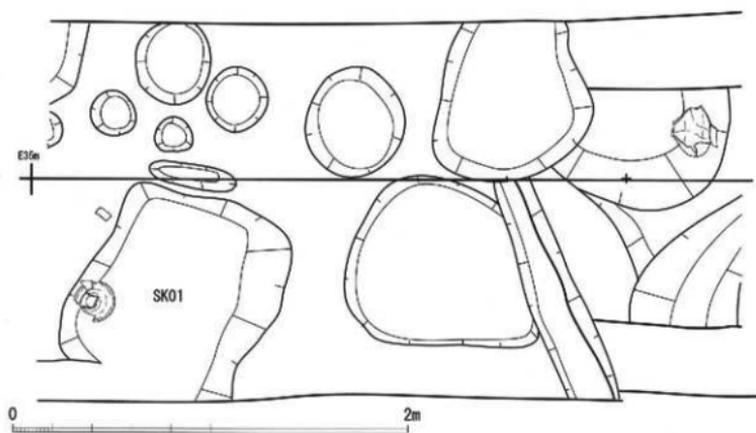
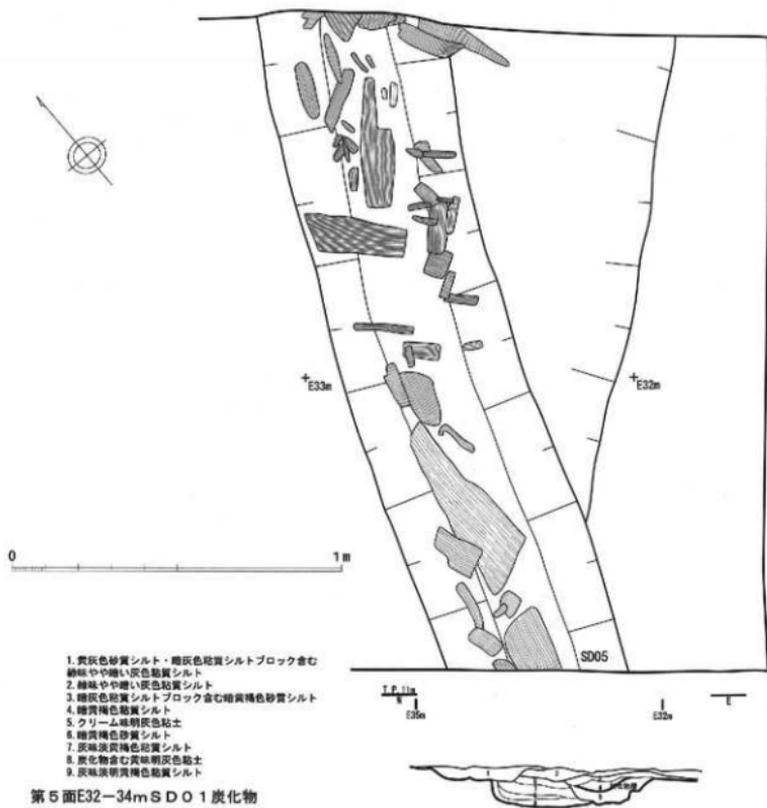


図8 東西区第5～7面検出・出土状況

遺構の年代は、出土遺物から5世紀末～6世紀初頭にあたと考える。

(田村隆明)

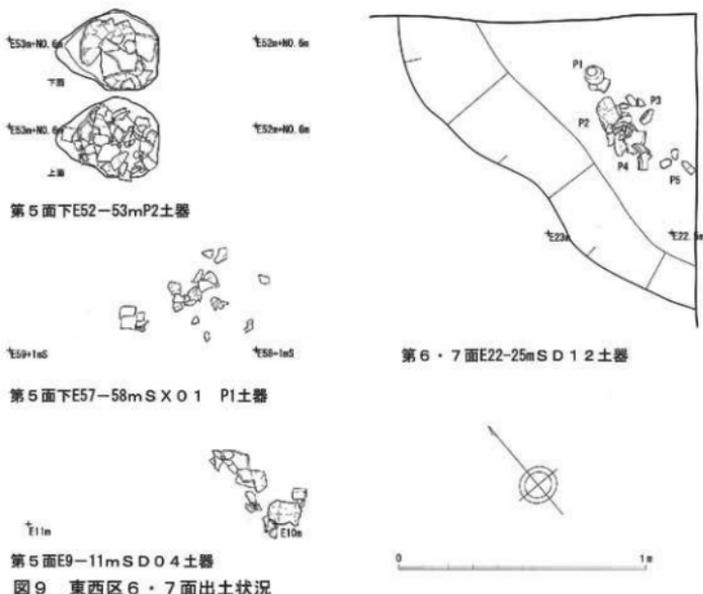
3. 第6・7面

第6面はE20～65m付近のくぼみを中心として溝・落込み・土坑を検出した。E30～45m地点までは地形の鞍部に掘立柱と土坑が集中する。これらは弥生時代中期を中心とした時期であり、大きくは2面で構成される。この東西側の遺構面は上がり、西側はE70m付近で上がり切る。東側はゆるくあがった後に、高川に向かって下がる。その微高地状になったE22m付近では上層に小形甕などの土器が廃棄された後葉の土坑や、E32m付近の土坑SK04の上層に完形に近い前葉の甕が出土する弥生時代中期の土坑が見られた。

第7面が良好にとらえることができるのは、東側のE5～20mの間である。E10m付近では淡灰色砂を埋土とする東西溝SD04、E15～21mの幅2.1mの南北溝SD03で弥生時代前半期の土器が見られる。前者は断面コの字形で埋土に淡灰色の粗砂がつまり水路の可能性があったとともに、それより下がる東側は高川と併行する南北方向の畦畔状の隆起が見られた。一方、後者は東側が深い断面レの字形を呈し、南の東西溝と接続する可能性があることから、北東側にマウンド状のものがあつたと考えられる。

全域に見られる灰色砂礫は縄文時代晩期から弥生時代中期初めの間にかけて堆積したと考えられ、これより下に深く調査掘削したE13m付近でオリブ味暗灰色・黒味青灰色粘土をT.P.9.0～9.4mで確認し、わずかに縄文土器細片が出土している。

(一瀬)



第5章 南北区の調査

第1節 各遺構面の調査

1. 層序

南北区の地表面はおおむね T.P.11.6 m を前後し、1.1 m 前後の厚さの盛土があり、その下に旧耕作土が部分的には確認できるが、おそらくほとんどが麗天館建設時に持ち去られ、上に拳大から人頭大の乗石が 0.3 ~ 0.4 m の厚さで敷かれていた。

その下は薄く緑灰色砂、暗灰色粘・砂質シルトが 0.05 m の厚さで貼りつく。その下も同様な厚さで濃オリブ味の灰褐色粘質シルトを基調とする細層がはさまむ。その面前後が上面検出面となる。遺構は茶・灰褐色粘・砂質シルトを基調とする埋土である。

その下層は S15 m から南側において下層の淡灰色砂礫系の土層がすぐに検出でき、その北側はそれが 0.2 ~ 0.3 m 下降する鞍部となる。T.P.10.5 ~ 10.0 m の高さである。その埋土の上、0.1 m の厚さで黄褐色粘質シルトを基調とする層があり、下が礫化面をもつ黄褐色砂質シルトを基調とする下面がある。

上面は土釜などから 15・16 世紀頃に、下面は瓦器碗などから 13 世紀前後に相当する。

2. 上面

S16 m の地点では土釜がピットから出土しており、15 世紀末から 16 世紀初めにかけてと考えられる。その北側には、覆土がないため下面、上面が判然としないが、柱間 1.75 m 前後の N8.4° E の南北方向に 6 間分以上、黒味暗灰色系を埋土とする柱列を検出している。

S17 m 付近では、方形の掘方をもつ柱根固めしたと考えられる石を検出する。南側の柱列とともに掘立柱が集中するところであり、この付近に建物跡が存在していたことは確実である。さて、これより北側は谷状にくぼむためか、S23 ~ 33 m 間は、土坑・落込みが密集している。

最も北側の N 区では、幅 1.5 m の北西-南東方向の断面コの字形を呈する溝 SD01 を検出しており、島本町教育委員会による駅前広場の調査時に検出されたため池を取り巻く蛇行した溝につながる可能性がある。

3. 下面

最も北側の N 区 SD02 では 12 世紀中頃の瓦器碗が出土している。幅は 3 m 以上の断面皿形で、上面の SD01 より北よりの軸方向をとり、これより北側には細い谷が南東より入り込んでいたと考えられる。一方、最も南側でも、同様な方向の溝 SD01 を検出している。

下面は S20 ~ 33 m 間の中央がよく残るが、土坑・落込み・溝が上面と同様に主体的である。土坑 SK01・SK02 から土師器細片が出土する。 (一瀬)

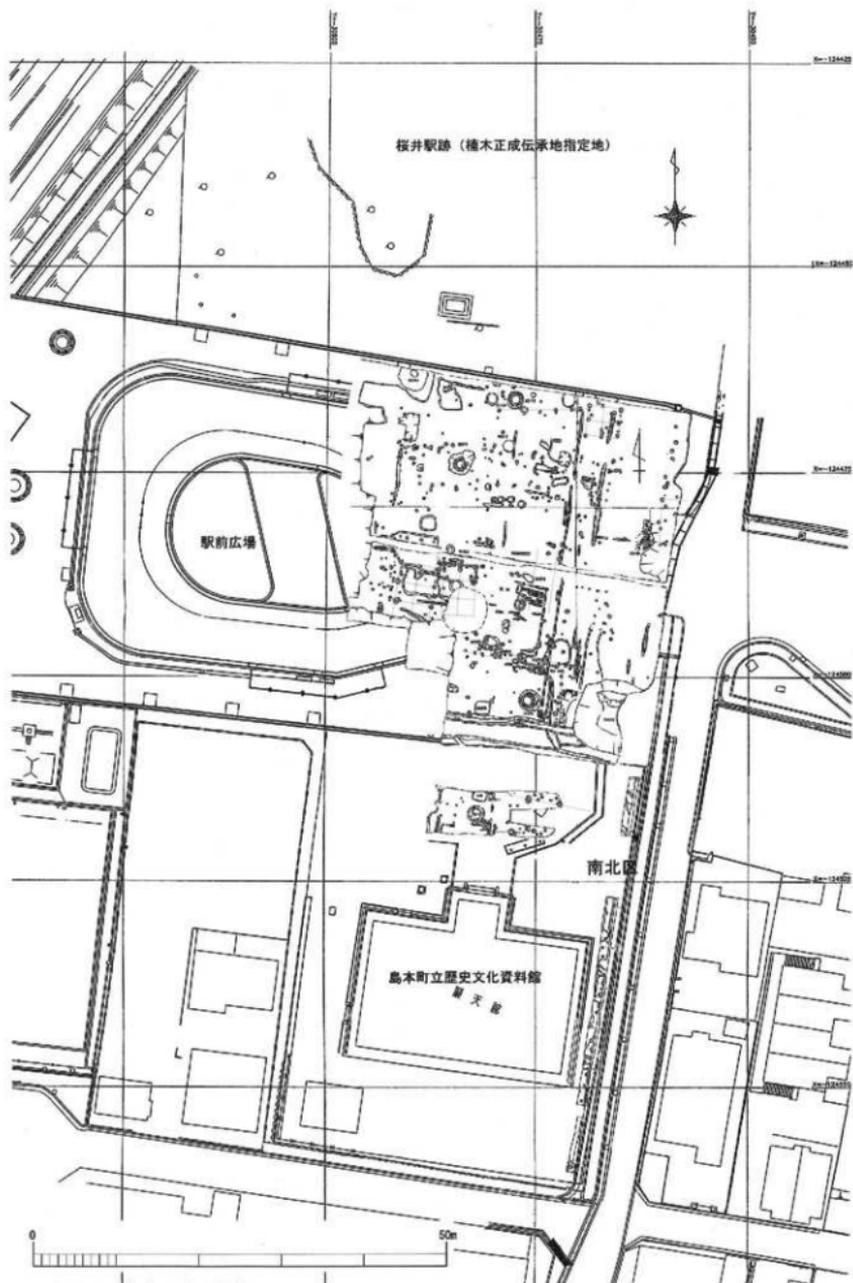


図 10 南北区地区設定

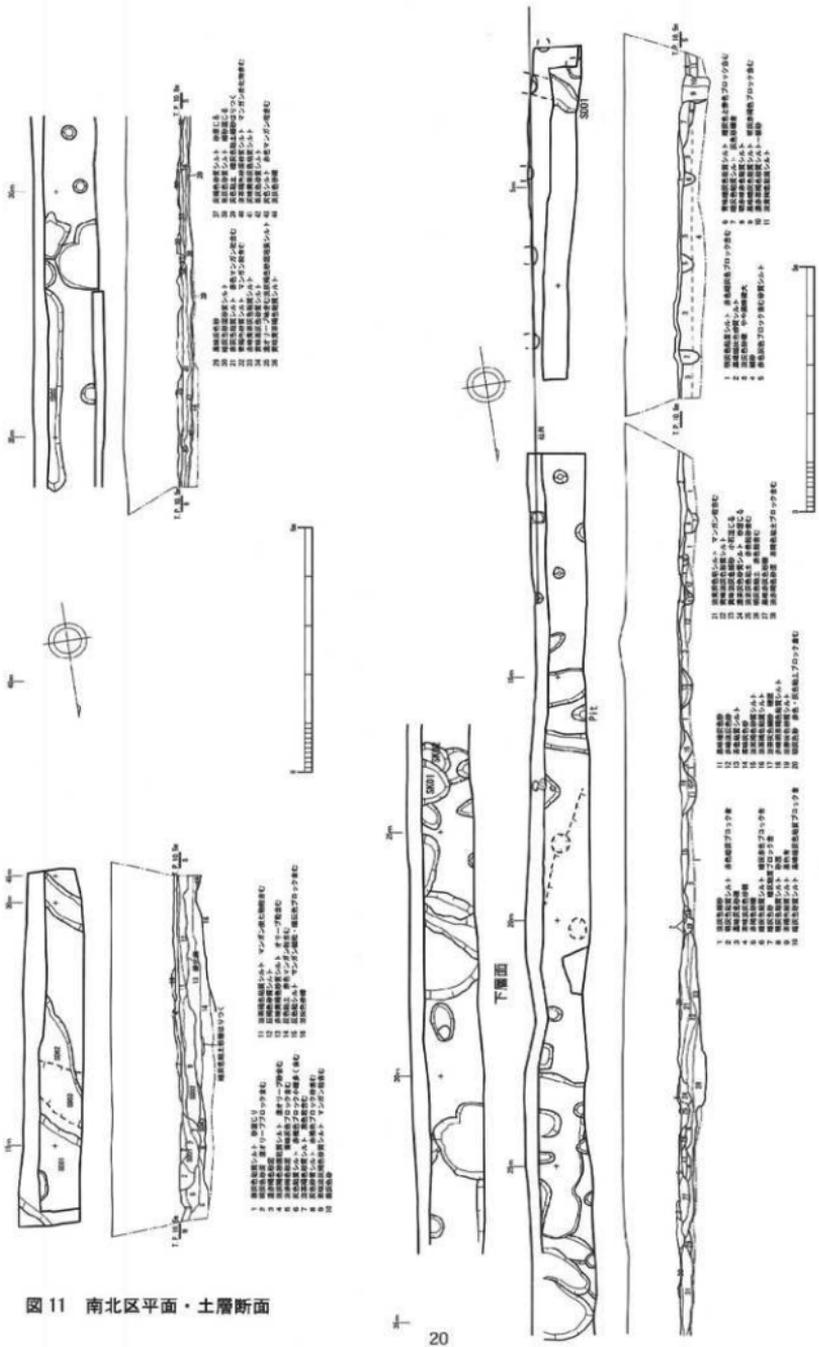


図 11 南北区平面・土層断面

第5章 出土遺物

第1節 東西区の弥生・古墳時代

1. 弥生時代から庄内期

今回の調査では、弥生時代から近代まで、土器・陶磁器を中心として多岐に渡る遺物が出土した。

第6・7面を通じて残存状態の良い壺形土器が6点出土した。平成17年度島本町教育委員会によって行われたJR駅前広場整備に伴う調査においても、遺物に伴う遺構は検出されていないが弥生第Ⅰ様式の甕形土器(注1)の破片、V様式の甕形土器(注2)などが出土していたため、弥生時代の遺跡の存在は推測されていた。上記の報告(注3)においても、桜井駅跡の北西に隣接する桜井遺跡における弥生時代の遺構面が断続的に拡がる可能性も示唆される。今回の調査において同時代の出土遺物と検出遺構とともに、東へ行くほど密度が高くなる。

1の壺は今回出土した弥生土器の中でも際だって古い様相を見せる。頸部の接合方法や全体の形状からⅡ様式に属するものの口縁の拡張が発達していないこと(注4)、内外面に施されたヘラミガキが非常に密であることから、Ⅱ様式の中でも極めて古い段階に属する。2の甕は破片であるが、底部から体部にかけてあまり拡がらず、後出の土器には見られない下部での底部と体部の接合痕、外面に残る縦ヘラケズリ、内面下半のハケメが削られずに残存していること(注5)など1に続いて古い様相を見せる。7面のSD03内からという出土状況を考慮してもⅡ様式に属するとして矛盾はない。続いて古い様相を持つⅡ様式のもは10の壺である。底部と体部の接合痕が下方にあり、内面下半のハケメ、内面全体に施されたヘラミガキがともに密で明瞭である。頸部から肩部にかけての櫛描直線文は回転性がある。

3の破片は複雑な櫛描文が見られ、その発達が最も著しいⅢ様式に属する。これに伴件する4も(注6)Ⅲ様式である。口縁部端面・内面にも模様は施され、3同様に複雑な櫛描文を見せ、文様原体が使い分けされる。体部・口縁部内面のわずかに回転させた列点文と波状文はともに8条であり、使用された原体は同一であろう。端面の刻み目と円筒状の原体を押しつけたと見られる円状の列点文は櫛描文とは別の原体を使用したと見られる。残存部(注7)において、列点文は4個×3列が基本単位であるが、一方所のみ4個×2列と5個×1列が1単位になる。列点文間の刻み目は不定数で(注8)、刻み目の方が先行する。口縁部端面には明瞭な指頭圧痕が並び、文様の要素を見せる。同様に端面に装飾を持つ壺9も(注9)3・4同様SK01からの出土であるが、2点より上層での出土である。口縁部端面が装飾のために発達し下方に垂れ下がること、断面三角形の貼り付け凸帯などから、Ⅲ様式に属するものの4よりやや新しい様相を見せる。

5も同じく断面三角形の凸帯を持ち、口縁部が下方に垂れ下がる壺形土器である。しかしながら、口縁部の文様が比較的シンプルになり、凸帯も貼り付けてはいるが、退化傾向にあり、頸部から口縁部にかけて、内外面ともに調整も簡略化傾向にある。内面には指でなでたあとが残る。口縁部端面と内面の櫛描文はともに8条で、模様付けに使用した原体は1つであろう。このことと

出土状況とを踏まえて、前述のⅢ様式に比べてやや新しいものである。Ⅲ様式とⅣ様式の壺形土器は明瞭な区分が難しいが、Ⅳ様式に近いものと考え。8の小形壺は器面の荒れがひどく調整痕の確認が困難であるが、内面上半のヘラケズリとその結果生じた器面の薄さ、底部から体部にかけて張り出す形態から比較的新しいⅣ様式に属する。6と7は底部のみの小片であるため情報量は少なく器形の特定はできない。6は共伴する壺と同様Ⅲ様式に属する。7は底部のややくぼんだ形態と粘土充填痕があることからやや新しく、Ⅴ様式に属する可能性がある。

11の壺は庄内期古段階に属する（注10）。底径が縮小して尖り気味傾向にあり、土器の底部から下半にかけて張り出し部近くまで接合痕がなく、下半が鉢として成立し得る。このことにより器高に対して最大径の位置が高く体部中央に近くにある。丸みを帯びるものの肩が張り、球体に近いとは言いがたい。また、ヘラミガキが外面全体に密に施される。内面下半にはハケ目が残る、庄内期の特徴的なものにはあまり見られない調整痕が残る。しかしながら、土器全体に表れる粘土接合単位が、弥生時代の土器とは一線を画する。

今回の調査で出土した弥生土器は、Ⅲ様式に河内では多用される麻状文が全く見られず、断面三角形の凸帯が好んで採用されることなどから、地理的環境から推測される通りの典型的な北摂の様相を見せる。また、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・庄内期を通じ、各々同時期の基準資料と比較してミガキが多用される点が特徴的であると言える。

2. 古墳時代

古墳時代以降の遺物は後世の削平を受け、(特にE22～31mの区間で)上層からも出土するが、主に第5面の出土遺物から5世紀末～6世紀に位置付けることができる。5面SX01・P1出土の13・14の甕は、くの字に屈曲する口縁部、外面のハケ目、内面のヘラケズリによる体部の薄さなどに特徴づけられる布留期である。13は特に、水平面を持つ口縁端部、ナデ肩の体部から中段階に属する。15～18の須恵器はすべて5世紀末～6世紀初頭頃に生産されたと見られる。15は体部が残存しないため確定できないが、甕もしくは甕の口縁部であり、16～19はすべて蓋杯の身で、19以外はTK47型式（注11）に属する。体部全面にいていねいな回転ヘラケズリが施され、全体的に薄手でシャープな印象を与える。口縁の受部内側に立ち上がりを貼り付けた後、内面にはいていねいな横ナデが施されるが、接合の痕跡は沈線状に明瞭に残る。19は基本的な成形・調整方法は前述のものを踏襲するものの、立ち上がりが比較的内傾して短く、器高がやや低くなることから、TK43型式と併行する時期まで下る可能性がある。

第2節 東西区の古代以降

1. 古代

古代の遺物は8世紀の土器を中心に第4面より出土した。20・21の土師質小皿、22～25須恵器杯B蓋（注12）は残存状態によりツマミの有無は不明であるが、すべて受部が退化し、器高が低く、口縁部が屈曲化の傾向を見せ、平安京I期にあたる8世紀後半に属する。28・29の

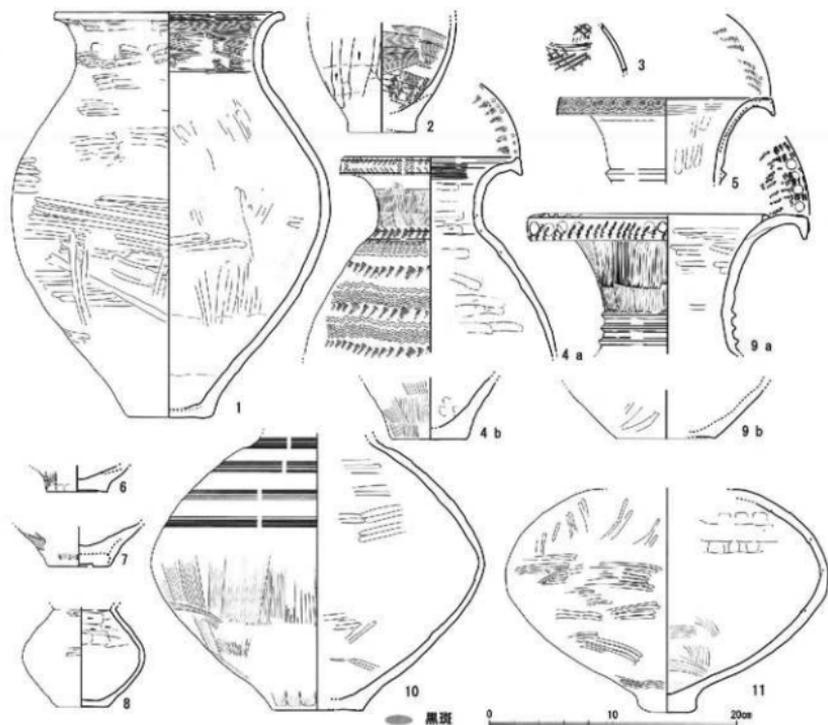


図 12 東西区出土弥生・古墳時代土器

鉢もほぼ同時期に属する。ただし、25のみ、他と比べて径が大きく口縁部の屈曲が激しく水平面が広いことなどから、4面下層からの出土ではあるが、やや新しい様相を見せるとも言え、平安京Ⅰ期でも新段階の9世紀まで下る可能性もある。26の杯B身も口縁端部の丸さと全体的に極めて薄いことから、やや新しく9世紀、平安京Ⅰ期中段階に属する。27の杯の高台付き底部の破片は、明瞭な台形の貼り付け高台端面の凹みからやや古い様相を見せており、平城Ⅰ期末からⅡ期初頭に併行する、8世紀前半に属する。

2. 中世以降

中世以降の遺物は主に第3面より上層から出土した。30・31の瓦器碗は14世紀初頭のものである。径が縮小化され、径に対しての器高が高く半球状に近い形なり、内外面の暗文も簡略化され非常にまぼらになる。32・33の瓦器は径の大きさ、暗文の密度からやや古相のものであり、13世紀後半頃に位置づけられる。34～38の貿易陶磁器と国産陶器はすべて14～15世紀頃のものと考えられる。34・37の青磁は越州系のものであろう(注13)。また、37が出土したSD01からは、下半に『和』の文字が残る銅銭が出土した。第2面の時期の手がかりとして

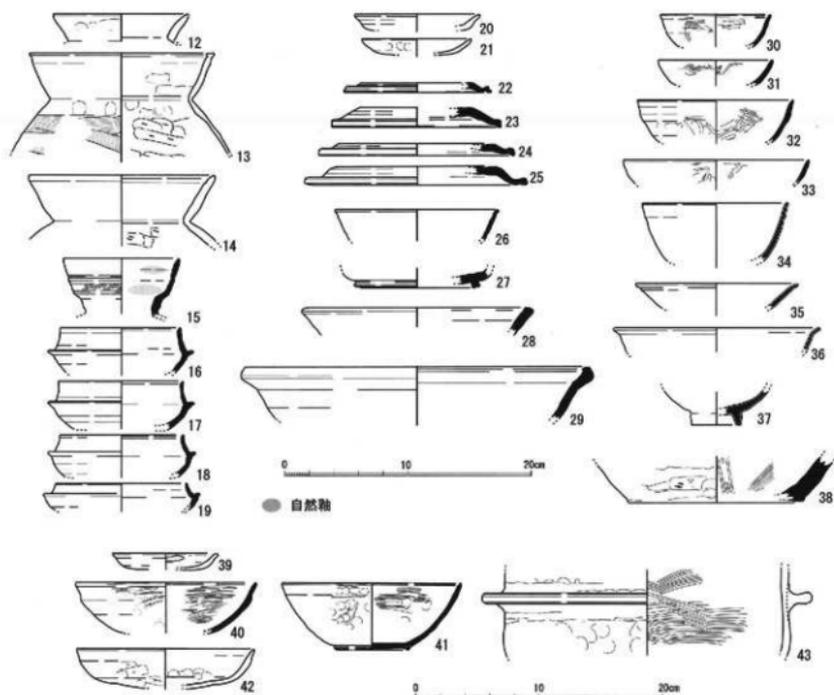


図 13 東西区出土古墳時代～古代以降・南北区土器

1610～20年代に流通した元和通宝などの可能性がある。4面上層と3面より各々1点ずつ土鍾が出土した。

第3節 南北区

南北区から出土の遺物は、現段階では未整理であるが、主に出土した中世の遺物の中から残存状況の良いものを紹介する。39の土師質小皿は、手づくねで生成された様子で、ていねいな調整痕が見られないものの、内面に楕円状の暗文がかすかに見られ、古い様相を残す。11世紀初め頃であろう。40・41の瓦器碗はともにⅡ型式、12世紀半ばのものである（注13）。外面の暗文は簡略されるが、内面の暗文の密度は高い。41は高台が明瞭に断面三角形の形を呈し、底部内面にもかすかに螺旋暗文が残る。42の土師質皿は、口縁端部が外反するものから立ち上がるものになり、端部断面が三角形に変化していく転換期のものであろう。43の土釜は内面に明瞭にハケ目が残り、ほぼ同一型式のものと見られる破片が島本町教育委員会の調査（注14）においても15世紀末から16世紀初頭のものとして報告され、上面で検出されたピットの年代の一部が分かる。

（小川裕見子）

(注)

- (1) 『島本町文化財調査報告書第8集』島本町教育委員会 2006
- (2) 『島本町文化財調査報告書第9集』島本町教育委員会 2006
- (3) 『島本町文化財調査報告書第9集』島本町教育委員会 2006
- (4) 『IV.山城(乙訓)地域』『京都府弥生土器集成』(財)京都府文化財調査研究センター 1989
当該調査区の地理的環境から、淀川・桂川を媒介として山城地域の土器様相は参考になり得ると考えた。
- (5) 弥生土器の成形・調整方法に基づく相対年代は主に、小林行雄・佐原真『紫雲出』詫間町文化財保護委員会 1964、「池上・四ツ池」1971『第2版和国道内遺跡発掘調査報告書4』第2版和国道内遺跡調査会 1970を参考にした。
- (6) 4aと4bの破片に直接的な接合関係はないが、同一遺構内から出土した罫を埋める破片に上部の模様と下部のハケメの連続性を示すものがあり、同一個体であることはほぼ間違いない。
- (7) 口縁の残存状況は約80%。
- (8) 実際の模様つけの進行方向は不明であるが、残存部を時計回りに、7、6、5、5、7、10、12列である。
- (9) 9aと9bの破片には直接的な接合関係はないものの、出土状況や胎土の様子から同一個体と見なすことができる。
- (10) 古式土師器の成形・調整に基づく編年は、一瀬和夫・久宝寺・加美遺跡の古式土師器『大阪府文化財論集』(財)大阪府文化財センター 1989を指標にした。
- (11) 平安学園考古学クラブ『陶器古窯址群』I 1966、田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- (12) 古代の土器における器種名称は藤原・平城京において使用されているものを踏襲し、年代想定の際としても使用した。奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』IV 1966・『平城宮発掘調査報告』VI 1974・『平城宮発掘調査報告』VII 1976、古代の土器研究会『古代の土器』1 都城の土器集成 1992
- (13) 瓦器の分類と編年は主に白石久一郎『いわゆる瓦器に関する2・3の問題』『古代学研究』第54号 1969を指標にし、中世の土師器・陶磁器に関しては『世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』を参考にした。
- (14) 『島本町文化財調査報告書』第9集 島本町教育委員会 2006

平成17・18年度の調査では、藤田道子、大矢祐司、佐藤陽子、宇都宮 主、松村祐香、田村隆明、牧田梨津子、登ノ木智子、櫻橋美穂香他、諸氏・諸嬢の協力があつた。

第6章 まとめ

東西区東端では弥生第Ⅱ様式初めの壺形土器を含む溝や周溝状の遺構、その下で縄文土器包含層を確認し、東西区中央から東端では、弥生第Ⅲ・Ⅳ様式の壺・甕形土器などと土坑・落ち込み・溝を、さらに、庄内・布留期の壺・甕形土器を含んだ溝や整地層などを検出した。東西区東側では、5世紀後半から6世紀前半の軸を同じくする炭化物層を含む溝や掘立柱建物も見られた。さて、8世紀以降の古代は重層的な耕作層が東西区で見られた。出土土器は西半に多く分布する。この一連の堆積は13～15世紀を中心とした時期であり、酸化面をもつ多少の起伏があった面を削平することで主に8世紀後半以降から中世期に安定した耕作面が広く獲得されていた。

一方、南北区は下部が中世面に削平を受けて残らないが、当該期で2面が確認でき、南北の柱列と東西の溝を検出し、北側の島本町教育委員会が検出した中世屋敷地が広がることが分かった。

こうした所見のうち、東西区全域に及ぶ東西南北の小溝はN7・8°E方向が多く、また南北区においては同方向の掘立柱列を検出していることは相互的に関連していたことを示している。状況的には、史跡指定地を中心にした中世遺構・遺物が特に濃密な場所が東西区の成果と合わせると限定でき、その境は東西区の西端あたりとなる。すなわち、試掘調査のNo.1～3の付近と南北区がT.P.10.5 m前後が中世の主要面となり、その内部には遺物出土の集中とともに、掘立柱建物・石組み井戸などの屋敷地に伴うであろう遺構が分布する。これに対して、No.5から東側は、T.P.10.1 mへと中世主要構成面が一段下がった平坦面となっており、その下がったところが終始、小溝を伴った耕作地として位置づけることが可能であるからである。

この境を屋敷地東辺として考え、北側を見ると、遺構面が平成18年度の島本町教育委員会の調査で史跡指定地をこえるところで下がるのが分かり、これを北限とできる。南側は島本町立歴史文化資料館用地から現況周囲が一段下がることから南限とする。これらにより、南北方向に180 mの範囲の屋敷地が想定することができる。一方、東西区で検出した小溝群を伴った整地層は東端まで途切れなかったことから、今回の東調査区が史跡桜井駅跡から東方、南北に流れる高川までの間であると考え合わせると、この川を最小単位の東限となる。そこで、高川を見ると、これより北側250 m程で大きく屈曲する。これを耕作地といった生産域をも囲む区画があったとすれば、この屈曲部が北東隅にあたる可能性が強い。この西側をみれば、桜井遺跡の丘陵が一直線状に下降する部分があり、北西限とみなすことができる。また、南東隅は高川が直線を外れて南東に屈曲する部分があり、その西側も道が屈曲する部分がある。

これらより、生産域をも飲み込んだ550×310 mの南北に長い長方形区画を描くことができるのである。この区画からすれば、史跡指定地は中央北に位置することになる。濃密な居住域、屋敷地と推定される方形区画がこの外区画の東西中央に設定されたとすれば、その西辺は北側がJR線と重なる地点を導き出すことができる。以上、南北方向に180×120 mの範囲を内域とする屋敷地を復原することが十分に想定できるようになった。

(一瀬)

報告書抄録

ふりがな	さくらいえきあと はつくつちょうさがいよう						
書名	桜井駅跡発掘調査概要						
副書名	一般府道桜井駅跡線自歩道・主要地方道西京高槻線歩道整備工事に伴う調査						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	一瀬和夫・岡田 賢・小川裕見子・田村隆明						
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351						
発行年月日	2007年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
桜井駅跡 西国街道	馬本町桜井	27301 6 1001	34°52'53"	135°39'49"	2005年7月13日 5 2007年3月31日	735m ²	道路整備 工事

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桜井駅跡	その他(駅) 集落跡 生産遺跡	弥生時代 古墳時代 古代 中世	弥生:土坑、溝 古墳:土坑、溝、掘立 柱建物 古代:土坑、溝、落ち 込み 中世:土坑、溝、落ち 込み、ピット	弥生:土器 古墳:土師器、須恵器 古代:土師器、須恵器 中世:土師器、瓦器、 陶磁器、銅銭、 瓦	遺跡東半に弥 生時代の遺構・ 遺物が良好に残 る。 古墳時代の掘 立柱建物。 奈良時代以降 の開発と中世の 方形区画。
西国街道	その他	近世			

桜井駅跡発掘調査概要

一般府道桜井駅跡線自歩道・都市計画道路桜井駅跡線(駅前広場)整備工事に伴う調査

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351

発行日 2007年3月31日

印刷 株式会社印刷センター



E83-96m 第1面全景(東から)



E70-78m 第1・2面 全景(東から)



E64-70m 第1・2面 全景(西から)



E32-48m 第1・2面全景(西から)



E7-20m 第1面全景(東から)



E32-48m 第3面 全景 (西から)



E32-48m 第4面下 全景 (東から)



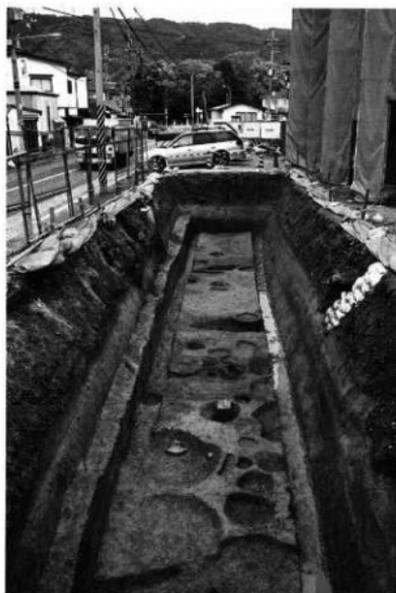
E32-34m 第5面上 SD01検出状況 (北から)



E22-26m 第5面上 SB01検出状況 (東から)



E52-54m 第5面下 P2土器出土状況 (南から)



E32-48m 第6・7面 全景(東から)



E22-26m 第6面 SK04土器出土状況(南から)



E22-26m 第6面 SK01土器出土状況(東から)



S16-36m 下面 全景(南から)



S20-36m 下面 全景(北から)

